

*
*
*
ヘタレ系救世主伝説
*
*
*

八重代かりす

アルルクシルはボウディッカに尋ねる。

「《三国志演義》というものをご存知ですか？」

「いや、知らねーな」

「夏シヤの国にある物語です。一説によると源流は《異世界テツラ》の歴史小説だとか」

「ふーん。で、どんな話なんだよ」

こんな時だというのにボウディッカは与太話に付き合ってくれた。

だから、アルルクシルは滔滔と語る。

「舞台は四百年続いた王朝の末期。その辺境に主人公『劉備』は貧しい家の子として生まれます」

その王朝は末期だけあって、腐敗していた。腐敗は戦雲を呼び、叛乱は多発する。劉備はそんな世に心を痛めながらも、筵むしらを織って生活していた。

しかし、ある時、劉備は戦う事を決める。

何故なら、今でこそ劉備は落ちぶれているものの、実は皇帝の子孫であり、王家の血筋だったのである。だから、劉備は豪傑二人と義兄弟の契りを結び、天下に平安を齎し、皇室の権威を取り戻さんと立ち上がる。

ところが、その道を阻む者がいた。劉備の最大の敵『曹操』である。宦官の息子である曹操は鋭利にして冷酷だった。悪辣狡知の限りを尽くし、権力を握り、皇帝を蔑ろにし、天下の三分の二までもその支配下に置いた。

一方の劉備は志高くとも、その清廉ゆえに俗物に翻弄されること甚だしかった。また軽佻浮薄な曹操とは異なり、自らの才を誇らぬ慎ましい劉備はどうしても確固たる地盤を固められずにいたのである。

だが、それ故に集う者がいた。力無きが故に人を惹き付ける不思議な『徳』が劉備にはあった。乱世にあっても仁義を貫く劉備に共感した者たちが集った。自らの才無きが故人を受け容れる『器』が劉備にはあった。無力な劉備を放っては置けずに己の力を貸し出すとする者が集った。何よりも同じく乱世に翻弄され続けた民草達が集った……

劉備はその力を束ね、ついに天下の一角に一国を築く。

そして、劉備たちは三分された天下の中で、最も弱小でありながらも、最も果敢に曹操に挑むのであった……

……《シナリスターナ中国》と呼ばれる国で生まれ、《ワイクワイク日本》と呼ばれる国をはじめ、数多の国で伝えられた物語——その大要をアルルクシルは話し終え、一息をついた。

そして、ボウディッカに問いかける。

「さて、この物語の主人公は『劉備』です。でも、何故、主人公は劉備なんでしょうね？」

どうして、天下の三分の二を手に入れた『曹操』ではなく、三国の中で最弱だった劉備が主人公なのでしょうね？」

「愚問だな。それは劉備に人の弱さがあるからだ。人生や社会が順調に回っているなら、曹操に感情移入できるかもしれない。だが、そんな奴はほんの一握りさ」

即答だった。つくづくこのボウディッカの聡明さには圧倒される。

「その劉備って男、都合が良過ぎるよな。ま、史実ではなく小説なんだから当然かもしれないが。『実は王家の血を引いていましたー』とか『無能なんだけど、不思議と人には好かれますー』とか——でたらめだよ。努力も研鑽もせずに『俺はやればできる』とかほざく阿呆の願望そのものだ。……しかし、それでいい。そうでなくてはいけない。——世の大多数にとっては」

おそらく、曹操は有能だったのだ。軽佻浮薄ということは判断力と行動力があつたのだ。悪辣狡知の影にはそれを支える教養や学識があつたのだ。そうでなくては天下の三分の二を掌握できまい。そもそも、皇帝を蔑ろにしたとあつても、民衆を飢えさせたとはない。温情深い男とは限らぬが、一定の行政手腕があつたのだ。

そもそも、ボウディッカに言わせれば、王朝が腐敗し叛乱が多発したのであれば、それは皇帝の責任である。その結果、数多の命が失われたのなら、皇帝が蔑ろにされるのは妥当である。弑殺されなかっただけで、ありがたい話ではないか。

結局、曹操は努力と研鑽の男だったのだろう。何しろ、宦官の息子である。世評に芳しからざるものがあつたに違いない。それでも這い上がり、押し上がったのだ。目に見えぬ地道な苦労を重ねてきたのだろう。

「……だが、そんな男に共感できる人間は少数だよ」

世の大多数には曹操のような教養や学識がない。そもそも生産力が貧弱な時代では文字を読める者自体が珍しい。何かを習おうとしても、金がなくては学校に行けない。努力と研鑽をやりたくてもやれない。

だが、曹操は違う。宦官の息子である。風聞に恵まれずとも、金はあつたはずだ。幼少の頃から、学校に行くこともできただろう。切磋琢磨するには恵まれた環境だったのだ。しかし、大衆はそのような環境にはない。

「だから、劉備に共感する。大衆と立場の近い劉備を主人公としてこそ、大衆に訴える小説として成り立つ。劉備の生き方は大衆の希望だからだ」

大衆には努力も研鑽もない。切磋琢磨できるほど、生活にゆとりがないからだ。

だから、努力や研鑽に依存しない希望が必要なのだ。

それが『実は王家の血を引いていましたー』であり『無能なんだけど、不思議と人には好かれますー』だという。

小説に耽溺する歳になった時点で、勉学で身を立てるには手遅れである。いきなり、教

養や学識が身に付くなど、不可能だ。これは武芸でも商売でも同じことだ。朝、目が覚めたら、突然、その分野で一流になっているなど、絶対にありえない。

だが、『実は王家の血を引いていましたー』ということは、不可能ではない。百代前まで遡れば、確率的にも無謀ではなくなる。それでも無理なら、家系図を捏造すればいい。あるいは『無能なんだけど、不思議と人には好かれますー』ということも、不可能ではない。困難だが原理的には可能性が残っている。弱者への哀れみを抱く者は確かに存在する。

人は曹操にはなれない。だが、劉備にはなれるかもしれない。

だから、劉備こそが主人公足りえるのだ。

「所詮は小説——虚妄に過ぎないがな。しかし、辛く苦しい人生には希望の光が必要なのだ」

そして、ポウディッカの炎の瞳が——考えれば、わかる話だろう？——と静かに語りかけてくる。

だが、アルルクシルは「……僕はわからなかったんですよ」と首を横に振った。

「裕福な親に育てられましたし、革命から建国への流れで、帝国は凄まじい成長を成し遂げました。僕が育ったのはそんな中だったんです。昨日より明日がよくなるのが当たり前、努力は必ず報われる。右肩上がりの経済が万人に十分な報酬を用意できる。だから、僕も曹操のように頑張ろうって。劉備のように【運命】に期待する必要はないって」

「そりゃ、甘えだな」ポウディッカが断じた。「確かにそういう黄金時代もあるだろうさ。だが、それは滅多にないから黄金時代なんだ。それを基準に物事を考えるのは甘えだ。小作人の子が小作人になる繰り返しは百年も続いたりするのは、小作人の怠けではあるまい。『劉備』が主人公になるというのは黄金時代の恩恵に与れる者が、時間積分でも空間積分でも、少数派である事の市場原理による証明なのだろう」

「……昨晚、チーシュイにも似たようなことを言われました。やはり、僕が間違っていたんですね」

アルルクシルは泣きたい気分になった。

——結局、わかっていなかったのは自分だけだったのだ。

ポウディッカは武断と霸道を好む気質であり、才覚においても麒麟児と呼ぶに相応しい大器である。劉備と曹操——いずれに近いかと問えば、間違いなく曹操だ。しかも、ポウディッカは今年十六歳である。あらゆる能力が右肩上がりの時期である。最も努力が報われ易い年頃である。『彼女』や曹操のような己の手で道を切り拓く人生に共感してしかるべきだ。ところが、劉備に傾倒する者の心も、一瞬で把握した。実に視野が広い。

——……僕とは大違いだ。

十四年前にはアルルクシルも今のポウディッカと同じ十六歳だった。だが、あの頃の

自分には劉備が主人公である理由がまるでわからなかった。頑張れば、己の手で人生を切り拓けると考えていた。努力や研鑽は報われると思っていた。『彼女』や曹操に憧れ、自分も同じ道を行ける筈だと、何の迷いもなく信じていた。

——嗤えるよな。現実の僕は『彼女』や曹操はおろか、このボウディツカにも遠く及ばぬ愚者でしかなかったというのに。

だから、妬みと嫉みと劣等感に満ちた眼差しをボウディツカに向けてしまう。

アル・イクシルの澁んだ情動に、ボウディツカは薄く微笑んだ。

「……覚悟が決まったか？」

「はい。他者に肯定してもらおうという甘えは棄てました。ここまで無能な僕を肯定できるほど、有能な他者は存在しません」

迫りくる敵軍に視線を変え、アル・イクシルは明言した。

友軍兵数二万。陣形は魚鱗（モドキ）。

敵軍兵数二万。陣形は鶴翼。

とりあえず、兵数は同じに持ち込んだ。

しかし、こちらは剽悍とはいえ、その殆どが略奪目当ての『連合軍』である。つまりは烏合の衆だ。対する向こうは、伝令一つで陣形を变幻自在できるほどに訓練を重ねた『正規軍』である。つまりは精鋭無比だ。装備も弓や斧を自前で用意させたに過ぎない友軍に対し、敵軍は鉄器の槍と盾で見事に統一されている。

何より致命的なのは、友軍二万には純戦闘員ではない、補給兼観戦兼予備兵力が混じっていることだ。とどのつまりは純戦闘員の家族なのだが、何故か彼らも頭数に入っている（【中原】で育ったアル・イクシルには『何だよ、それは？』という気分だが、まともな兵站機構が存在しない【辺境】ではこういう事がしばしばらしい）。

兵力は向こうの方が遙かに上だ。それはもう、馬鹿馬鹿しくなるほどに。

——結局、市街地や山岳部での合戦を維持できず、平野での会戦に持ち込まれた時点で……。

それがわかっているであろうボウディツカはせせら笑った。

「その『三国志演義』に夢中になる輩に共感できるなあ。……ああ、告白するぜ、正直見下していた。偏見があったよ。己を省みぬ輩に限って、何もしてなくせに『俺はやればできる』なんて夢を見やがる——と愚弄していた。だが、今はわかる。この絶望の中だと夢を見る者の気持ちがわかってしまう……」

若き傑物も弱音を吐いた。アル・イクシルは同意の言葉を重ねる。

「『俺はやればできる』——そんな都合のいい話でもない限り、この戦力差は覆せません。

そして、夢や物語とは、そこまで追い詰められた至弱いとき者たちの希望なのでしよう……」

「……この条件で勝利を得るためには、まさに奇跡が必要だ。その頭から奇跡を捻り出せ

るか？ アルルアイリムア・ムラート・アフヤド「白衣の賢者様」

——奇跡か。……できれば、そんな幻想に頼らず、生きてみたかったな。

これも甘えなのだろう。だが、アルルイクシルは悔やまずを得なかった。どこで間違えたのかといえば……。

話を半年ほど遡らねばならない。